

世阿弥の能

1991
作品ナンバー0336

文部省特選 優秀映画鑑賞会特別推薦 日本映画ペンクラブ推薦
1991年教育映画祭最優秀作品賞・文部大臣賞 毎日映画コンクール
記録文化映画賞 1991年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第1位

日本の古典演劇である能の基本を確立し、現代にもなお発展し続けるほど能の生命力を高めたのが、世阿弥元清（ぜあみもとときよ）である。映画は、能の生い立ちを語り、世阿弥ゆかりの土地を訪ねて、その生涯をたどり、自筆の能本など貴重な史料からその創作の秘密に迫るとともに、観阿弥作の「自然居士」（じねんこじ）、世阿弥作の「清経」（きよつね）「井筒」（いづつ）「融」（とおる）そして晩年の傑作「砧」（きぬた）と、世阿弥の能の舞台を観る。



世阿弥は南北朝時代の中頃、14世紀半ばに大和に生まれた。結崎（ゆうざき）の地を本拠とする猿楽一座を率いて活躍していた父の観阿弥は、京洛の醍醐寺での演能で名をあげ、その名声を伝え聞いた將軍足利義満は、観世父子の能を親しく見物した。以来、義満は若い世阿弥を寵愛し、絶大な支援を与えるようになった。

やがて、古典の教養を身につけた世阿弥は、王朝に題材をとった能の名作を次々と書き、猿楽や田楽などから発達してきた能の世界で、第一人者となった父親阿弥の能を、さらに「夢幻能」と呼ばれる歌舞中心の能へと洗練し、完成していった。

夢幻能とは、いまはこの世にいない人物が立ち現れて、在りし日の思い出を物語り、昔を懐かしんで舞を舞い、また闇の世界に消えていくという形式である。この夢幻能を完成させたことが劇作家・世阿弥の最大の業績といえよう。義満の庇護のもと、栄光を極めた世阿弥も、晩年は悲運が重なった。世阿弥は苦境の中で、俳優として、あるいは能の作者として、また観世座の大夫として、能を論じた『風姿花伝』をはじめとする多くの伝書を残している。

記録
35ミリ
カラー／49分
日・英・独・仏・西・
伊・葡語版

- 企画
(財)ポーラ伝統文化振興財団
- 協力
芸術文化振興基金
国際交流基金
- 監修・指導
東京国立文化財研究所名誉研究員 横道萬里雄
法政大学能楽研究所 表 章
文化庁主任文化財調査官 高橋秀雄
能楽プロデューサー 荻原達子
- 撮影協力
観世宗家／国立能楽堂／鏡仙会 他

- スタッフ
- 製作 村山和雄
福岡順子
 - 脚本・演出 村山正実
 - 撮影 西山東男
 - 応援撮影 八木義順
山屋恵司
本橋俊男
 - 照明 吉田栄子
 - 編集 東 祥高
 - 音楽 加賀美幸子
 - 語り 観世栄夫
 - 題字 小松茂美

- 出演 (五十音順)
シテ 浅見真州
友枝昭世
本田光洋
山本順之
西村高夫
塩津圭介
宝生 閑
山本則直
一噌仙幸
一噌幸政
小鼓 北村 治
敷村鉄雄
宮増純三
大鼓 柿原崇志
安福建雄
山本 孝
太鼓 小寺佐七
三島元太郎